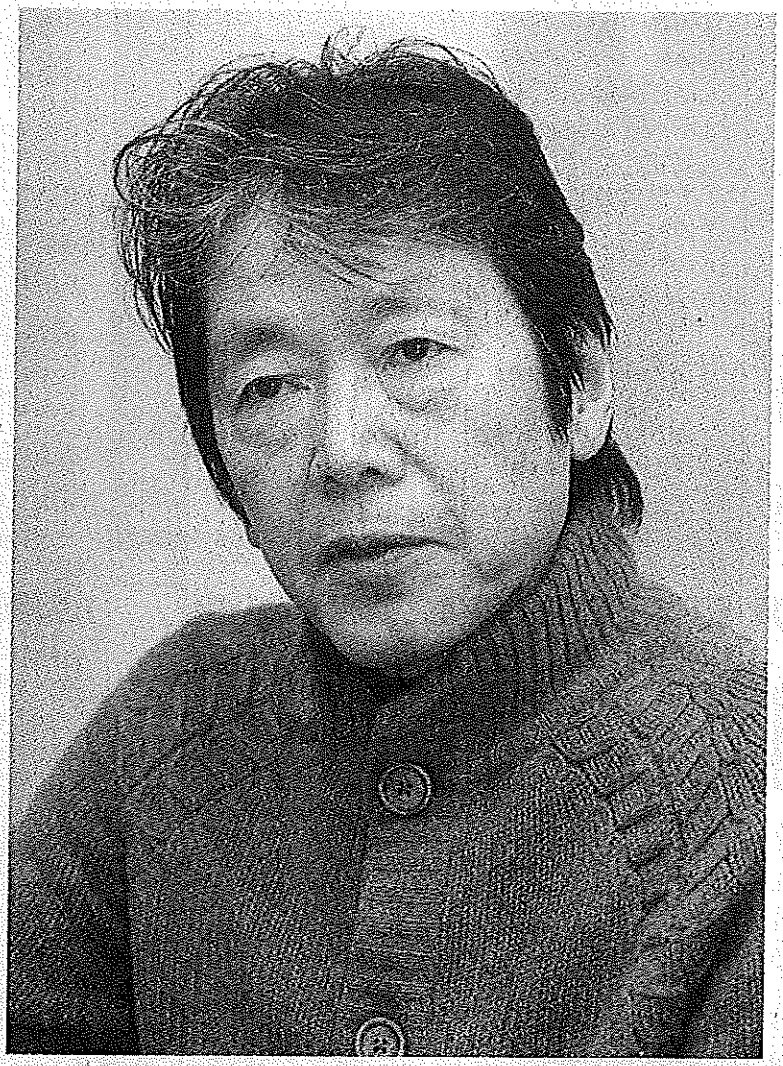
知新聞　第3種郵便物認可

出版

人生に遠回りも近道もない

「ロング・グッバイのあとで」

瞳みのる「自叙伝」



「芸能界と断絶したのは、お世話になった故柴田錬三郎さんと『二足のわらじは履かない』と約束したから」と話す瞳みのるさん＝東京都千代田区の集英社

1960年代末、グループサウンズの頂点を極めた「ザ・タイガース」のドラマー「ピー」こと瞳みのるさん。71年の解散後は芸能界を引退して勉強し直した。長年、慶応高校で漢文を教え、日中文化交流に携わってきたが、昨年春に退職。沢田研二さんら元メンバーとの再会を機に、音楽の道に戻ろうとしている。さまざまな思いを自叙伝「ロング・グッバイのあとで」にまとめた。

タイガース解散については「わだかまりがいっぱいあった」。京都の仲間同士で結成したバンドがプロデビューしたが、ロック志向のメンバーとアイドル路線を強いる所属事務所が対立。ある日、加橋かつみさんが脱退したことで、メンバーの心はばらばらに。

「『京都に戻ってやり直そう』と呼び掛けたけど、他のみんなには積み上げてきたものがあった」と瞳さん。解散の打ち上げで「10年後、君たちはこじきになっているだろう」と捨てぜりふを残し、関係を断った。

2年前、沢田研二さんが瞳さんの行きつけの店を訪ね回っていると耳にした。

「偶然の出会いのように再会できればと思って来てくれた。ちょっとシャイな彼らしい思いやりだと思った」。その年、元メンバー4人が瞳さんへのメッセージを込めた曲「ロング・グッバイ」を発表。

「それを聴いて、これまで固まっていたものが溶け出すような思いがしたんです」

友情を回復した5人は今、再結成に向け練習を続ける。

「タイガース時代の4年間が僕の中で占める割合が、日に日に大きくなっている」。それでも、高校教諭時代の33年間に得たものも大きかった。「だからこそ新しい目で音楽を見られたし、たくさんの生徒から、いろんなことを学んだ。結局、遠回りも近道もないと思うんです」

もう事務所に縛られることはない。「昔はできなかったことをやりたい。年を取ると、食べ物をいっぱい食べられなくなり、極上のものを少し食べたいのと同じ。自分たちが納得できる音楽をやっていきたい」

「ロング・グッバイのあとで」は集英社刊、1260円。